

「尾張名古屋は城でもつ」

前名古屋城管理事務所長
岡本 政 廣

1 徳川家康と名古屋城築城

- (1) 名古屋のまちは、慶長15年(1610)徳川家康が名古屋城を築城したことに始まる川のないところに造った城下町である。
東京、京都、大阪といった大都市は、まちに大きな川が流れている。
隅田川、賀茂川(鴨川)、淀川といった川である。
- (2) 慶長5年(1600)関ヶ原の戦いに勝利した徳川家康は、大坂に未だ残る豊臣方に対して着々と攻略の準備をしていた。
徳川家康は慶長9年(1604)江戸に幕府を開くが、濃尾平野は大坂の豊臣方が江戸へ向かうには通らなければならない重要な場所である。そこで、江戸を守る戦略的な防衛拠点となる城を名古屋(当時は那古野と書いた)に築いた。

2 徳川家康が考えた「御囲堤」

- (1) 徳川家康は、名古屋城を守るため、外郭の遠隔地に幾重にも防衛線を考えた。名古屋城の防衛線は、第一に木曾川、第二に庄内川である。
- (2) 第一の防衛線として、慶長13年(1608)家康は東国の防衛と治水のために、木曾川の犬山から河口まで50キロにわたり、「御囲堤」を造った。
「美濃の堤は、尾張の堤より3尺(90cm)低かるべきこと」というもの
これによって、尾張側の洪水を守ったが、慶長年間から宝暦年間の145年間に美濃側に110回の洪水があったと言われている。
- (3) 第二の防衛線の庄内川は、名古屋城から3キロの距離にあり、名古屋の東北部から西南へ流れている。この庄内川も木曾川と同様、川の南側つまり名古屋城側の堤防を強化している。どこまでも名古屋城下を守るという大きな目的のためであった。

3 尾張名古屋は城でもつ

- (1) 昔から「尾張名古屋は城でもつ」といわれてきた。城の役割は一言でいうと「備」
徳川家康は豊臣方だった大名に命じて「天下普請」という城をつくった。とりわけ、江戸城、名古屋城、大坂城など大きな城の天守閣が天にそびえていた。しかし、名古屋城を除いて主だった城は火災や落雷などで江戸時代の半ばには全て消失し、その後再建されていない。
- (2) 名古屋を通りがかった街道を歩き交う人々が、天守閣とその屋根上の金鯱に驚愕し、誰言うとなく「尾張名古屋は城でもつ」といわれたと伝えられ、その後、名古屋発展の象徴となっている。